

# 清代台湾中部山地における開発と社会 ——水沙連および埔里盆地における移住と族群関係——

菊池秀明

はじめに

中華世界とくに華南と呼ばれる南部地方は多くの民族が越境と衝突、融合をくり返してきた複合的な社会である。筆者は中国近代史を専門とする一方で、華南地方の移住と民族関係に関する研究を進めてきた。とくに17世紀以降に漢人移民の入植と開発が進んだ台湾について、大陸の事例と比較しながら研究を進める計画を立て、2023年7月に予備調査として中部地方の平野部を中心にフィールドトリップを行った<sup>1)</sup>。

本稿は2024年3月に中部山地の南投県埔里鎮を訪問した時の知見に基づく考察である。埔里は19世紀に平埔族<sup>2)</sup>（漢文化を受容したオーストロネシア系諸民族で、清朝時代には「熟蕃」と呼ばれた）を中心に開発が進んだ地域として知られる。また清代台湾の漢人移民は福建省泉州、漳州からやってきた福佬系、広東から入植した客家系、潮州系に大別される。彼らと平埔族そして日本統治時代に「高砂族」と呼ばれた原住民（清代の「生番」）という諸エスニック・グループ（現在の台湾ではこれを族群<sup>3)</sup>と呼ぶ）の関係史については、先学による貴重な研究業績がある。

その一人は埔里出身の宗教、民俗学者である劉枝万氏であり、氏の編著『台湾埔里郷土志稿』<sup>4)</sup>は歴史学の視点から見ても優れた著作である。もう一人は日本の文化人類学者である鈴木満男氏で、氏の博士論文『“漢蕃”合成家族の形成と展開——近代初期における台湾辺疆の政治人類学的研究』<sup>5)</sup>は清末埔里の地域リーダーだった望麒麟一家の歴史を描いた貴重なモノグラフである。さらに埔里の開発と族群関係の歴史については簡史朗氏<sup>6)</sup>、邱正略氏<sup>7)</sup>、洪麗完氏<sup>8)</sup>、葉育倫氏<sup>9)</sup>、鄧相揚氏<sup>10)</sup>らによる研究業績がある。

以下ではこれらの先行研究に学びながら、この地域の開発とそれがもたらした社会の変容について考察を進めたい。なお今回の埔里訪問にあたっては、邱正略氏および台湾大学歴史系の羅士傑氏、国立暨南国際大学歴史系の唐立宗氏、陳瑤真氏、蔡思薇氏に同行頂いた。記して感謝したい。

## 1. 水沙連における漢人の越境と郭百年事件

埔里鎮は台湾中央部、南投県の丘陵地帯に位置する。周囲を山に囲まれ、古くは湖であったが、眉溪、南港溪という二つの川からもたらされる堆積物によって盆地が形成された。気候は亜熱帯に属する割には寒暖の差が小さい。今回筆者が訪ねた3月も朝晩はひんやりと

して過ごしやすい印象を受けた。

この地で人間の活動が始まったのは紀元前にさかのぼる。1900年に日本の文化人類学者である鳥居龍蔵が埔里を調査し、烏牛欄台地で石器時代の遺跡を発見した。これが現在の大馬璘文化遺跡で、その後9回にわたる調査で紀元前3600年から同1000年頃の石器、陶器、石棺などが発見されたという<sup>11)</sup>。

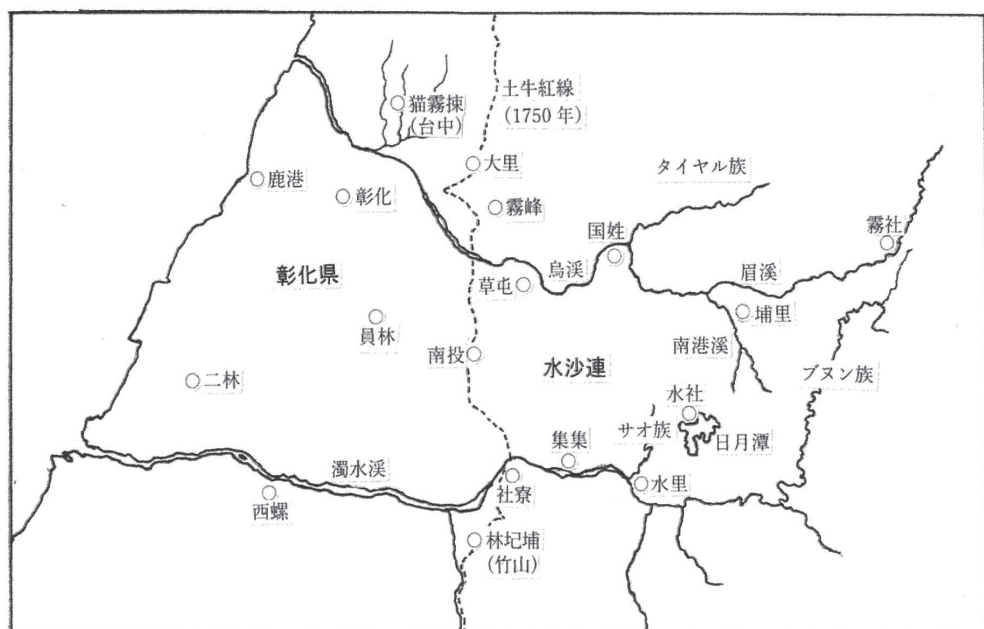
その後埔里盆地にはブヌ族系統の原住民が眉溪の南側に埔社と呼ばれる集落を形成し、眉溪北岸に住んだタイヤル族系統の眉社と対峙した。清代に入ると、埔社と眉社は日月潭付近に住むサオ族（邵族）の諸集落と併せて「水沙連」六社と呼ばれるようになった。ここで水沙連とは烏溪（眉溪と南港溪が合流した後の河川名）と濁水溪流域を含んだ台湾中部「内山」地区の総称である。伊能嘉矩によると、この名前は彰化平原の山裾に住んでいた平埔族が、内山に住む原住民をツアリヘン（沙連）と呼んだことに由来するという<sup>12)</sup>。

水沙連に漢人の影響力が及んだのは17世紀後半のことだった。鄭氏政権が台湾へ入ると、鄭成功の幕僚だった参軍の林圯は濁水溪をさかのぼり、竹園仔莊を拠点として開墾事業を進めた。それはこの一帯に住んでいた原住民スウ族（鄒族）の抵抗を招き、林圯は殺害されたが、彼らの占領した地域は林圯埔（現在の南投県竹山鎮）と名づけられた。また屯弁（屯田将校）の杜姓、頼姓はさらに濁水溪上流へ進出し、南岸に社寮、後埔仔などの拠点を築いた。この結果、林圯埔一帯は水沙連で最も早く漢人の勢力範囲下に入ったという<sup>13)</sup>。

次に水沙連に対する漢人の勢力が拡大したのは、1721年の朱一貴事件（台湾三大民変の一つ）に端を発したサオ族の抵抗運動がきっかけだった。鄭氏政権の滅亡後、水沙連の諸社は清朝に帰順して「輸餉」即ち一定の税を負担していたが、朱一貴が蜂起すると彼らは社商（漢人商人）との橋渡し役だった通事を殺害して税の納入を拒否した<sup>14)</sup>。また朱一貴と袂を分かった杜君英（広東潮州府海陽県人）の蜂起軍が鎮圧され、清朝が虎尾溪以北に彰化県を新設すると、福建水師提督の藍廷珍（福建漳州府漳浦県人）は大肚溪以北に藍興莊を設け、「藍張興」の墾号（地方政府に開墾の許可を取りつけた地域開発の単位）を立てて漳州系の移民を招き開墾を進めた<sup>15)</sup>。

すると一旦は清朝の「招撫」（帰順政策）を受け容れたサオ族であったが、1725年から水社の頭目骨宗（クツツォン）親子が中心になって漢人集落に対する襲撃（出草即ち首狩り）をくり返した。これに対して清朝は弾圧方針で臨み、1726年末に二手に分かれて水沙連へ進攻した。骨宗らは捕らえられて処刑され、彼らが殺した漢人の首も押収された<sup>16)</sup>。この骨宗事件（水沙連の役）によってサオ族の勢いは衰え、清朝は現在の台中付近に猫霧揀巡檢（文官職の一種）を置いて統制を強化したという<sup>17)</sup>。

18世紀半ば、清朝は台湾の漢人居住区と原住民地区の間に「土牛紅線」と呼ばれる境界線を引き、土壘を築いて相互の越境を禁じようとした<sup>18)</sup>。また1786年に林爽文が蜂起すると、清朝は帰順した原住民（帰化生番、化番ともいう）が「内山」へ逃げ込んだ反乱参加者の弾圧に利用できることに気づき、四川の例にならって平埔族の兵士（屯丁）に土地を与



【地図 1】台湾中部地図（著者作成）

え、平時は農耕を行わせ、反乱発生時に動員する番屯制と呼ばれる屯田制度を始めた<sup>19)</sup>。

だがこの時引かれた境界線は、漢人移民が「私墾」即ち原住民地区への越境行為をくり返したためにすぐに見直しを迫られた<sup>20)</sup>。また 1750 年には水沙連の開墾地を購入した漢人の李朝龍（武舉人）が小作料を独占しようとして佃戸（小作人）や平埔族と衝突した<sup>21)</sup>。この時係争地となった「水沙連」とは林圯埔、社寮一帯の限られた地域（沙連堡）を指しており、土牛紅線も埔里や後に濁水溪流域の要地となる集集堡の遙か西側を通っていた。だが清朝の地方政府は「水沙連二十四社」を平埔族から税を徴収するための単位としか認識しておらず、番屯制が始まった時もここに積極的に屯丁を配置しなかったという<sup>22)</sup>。

この結果、アヘン戦争期の台湾兵備道として知られる姚瑩の『東槎紀略』に収められた佚名「水沙連紀略」が「水沙連は番社で久しく租税を納めている場所だった。だが埔里は界外の番社で、越境して開墾することが禁じられていた。このため漢人が開墾しようと図ると、即ち水沙連の名前を借りた」<sup>23)</sup>と述べたように、水沙連は原住民居住区への越境を図る漢人移民にとって橋頭堡の役割を果たしたのである。

1814 年に漢人移民が水沙連入植の許可を取りつけ、埔里へ入って土地を占拠し、原住民を多数殺害する事件が発生した。水沙連の「隘丁首」（原住民の攻撃を防ぐ自警団員の首領）だった黃林旺は嘉義、彰化県の漢人である陳大用、郭百年らと共謀し、すでに死亡していた通事や土目の名を騙って台南の台湾府を訪ね、水里、埔里二社の屯田を漢人に小作させ、そこから得た収穫を不足している平埔族兵士の食糧に充てたいと申し出た。翌年知府がこれを認め、彰化県が墾照（開墾の許可証）を発給すると、これを手に入れた郭百年らは濁

水溪流域の社仔、日月潭付近の水里社およびその北にある沈鹿社でそれぞれ数百甲の耕地を開いた。さらに郭百年は民壮（民兵）、佃戸 1,000 人余りを率いて埔里に至り、土塁で囲んだ城を築き、「開墾」と大書した黄旗を立てた。

はたして埔里の原住民（埔番）はこれに服さず、双方が対峙する状態が続いた。すると郭百年らは番割（非合法に原住民地区へ入った漢人商人）を通じて撤退すると伝え、原住民を油断させたうえで、原住民集落を襲撃して「大いに焚殺をほしいままにした」。埔里の中心部を占拠した漢人移民は土塁や木で囲んだ砦を多数作り、さらに小作人を招いて開墾を行わせた。帰る場所を失った原住民は眉社などへ逃れた。

埔里で漢人と原住民が対立しているとの情報を得た清朝の地方政府は、官吏を派遣して調査させたが、原住民同士の争いに漢人移民が協力したに過ぎないとの報告を受けた。やがて台湾北部の巡視にやってきた台湾鎮総兵の武隆阿（満洲正黄旗人）が事態に気づき、彰化県知県の呉性誠を通じて陳大用らに小作人を退去させるよう命じたが、移民たちはすでに台湾府の許可を得ていることを理由に応じなかった。すると呉性誠は埔里が元々原住民の狩場であり、開墾を無制限に進めれば将来必ず反乱を招くので、今のうちに「全て駆逐して出山」させるべきだと上申した。この意見が通ると郭百川は杖刑となり、築かれた城は破壊されて、入植していた漢人は全て退去させられた<sup>24)</sup>。

この郭百川事件によって漢人による埔里入植の試みはいったん挫折した。埔里への入り口にあたる集集堡の洞角、北港溪堡の亀仔頭坪（現在の国姓郷亀仔頭）には、漢人の入山を禁じる碑文が立てられた<sup>25)</sup>。だが事件の首謀者の一人だった黄林旺は水沙連の有力者として影響力を持ち続け<sup>26)</sup>、「漢人が稍稍として再び入った」<sup>27)</sup>とあるように漢人の非合法的越境行為は止まらなかった。開発か、封禁かのジレンマは、清朝官僚の度重なる「内山」地区への入植解禁論となつてくり返されることになる。

## 2. 平埔族の埔里入植と清朝の開発解禁論

こうした中、実際に埔里に入植したのは彰化平原などに居住していた平埔族だった。1824 年に埔里社の土目である阿密らが作成した「保全を思い招派し、開墾して永く耕させるの字」は次のように述べている。

先年郭百年らが侵入して開墾し、争って埔里の地を占領し、社番を殺害したため、死んだ者はすでに半数を超えた。間もなく北から来た凶番がわが社が悲惨で番丁も僅かであることを窺い、ついに欺凌や擾害を受けたりして、安心して暮らすことができなかった。

阿密らがまさに保全の方法を考えていたところ、幸いにも思猫丹社の番親（サオ族の仲間）がやって来て相談をした。彼らの話では、先日も山へ入って鹿を捕らえたが……（中略）、山外の土地は漢奸に奪い取られ、住む場所を失うなど惨状は言うに堪えないと

のことだった……。

現在本社<sup>27</sup>の地は広いが番は少なく、しばしば北番の擾害を被っているが、共にこの地を守る壮丁は乏しい。もしこの打里摺（taritsi、番親のこと）が本社に来て、共に住んで開墾と耕作を行えば、第一に助け合って凶番に抵抗することが出来、第二に打里摺の平埔も永く住む場所を手に入れることができる。いわゆる一挙両得であり、虞れはなくなる……。

そこで平埔の打里摺を招いて社へ入らせ、踐土の盟約（春秋時代に晋の文公が諸侯を集めて行った盟約）を行って、社の務めに精通させた。凶番や漢奸はこれまでのように境界を侵犯することが出来なくなり、我々は保護されて安全に住み、彼らも散じて再び集まることが出来た<sup>28</sup>）。

ここでは漢人の侵入や高砂族の襲撃を防ぐために、漢人に耕地を奪われて居場所を失っていた平埔族を招いて開墾を行わせたと記されている。具体的にやってきたのは現在の新竹、苗栗一帯に住んでいたタオカス族（Taukat）、台中一帯に住んでいたパゼッヘ族（Pazeh）とバボラ族（巴布拉）、彰化平原の山裾に住んでいたパブサ族（Babusa）、ホアンヤ族（和安雅）など<sup>29</sup>）で、彼らは集落を単位にまとまって埔里へ入植した。また彼らは漢人から耕地を奪われた経験から、入植にあたって埔里の原住民と租佃契約を結び、原住民に名義上の所有権を与えながら、みずからは開墾および耕作権を手に入れた。

こうして結ばれた契約文書の一つ「合同約字承管埔地 第二号」は、埔里の福鼎金一帯の土地を「わが平埔番らと均分して墾耕させ、聊か日々の生活の資に充てた」とある。また他の土地と山林についても「およそ管理下にある地はわが平埔番らに与えて均分させ、開墾して田となった後は耕種させる。併せて泉水を加えて灌漑を充足させ、永く耕しておのれの産業とし、もって後望を慰む」とあるように、耕地だけでなく灌漑に必要な水の使用権も認めている。

続けて史料は埔里の開墾予定地を 10 等分し、北投社、万斗六社、阿里史社など 19 の集落に管理させると記している。またその一部を「公地」として残すことも明記された<sup>30</sup>）。さらにもう一通の史料「望安招墾永耕字 第三号」は平埔族が埔里の開墾権を与えられた報酬として、朱色の馬褂、綿被、布や鼎などを贈ったと記している。そして「これより招いた打里摺は社に入り、共に住み開墾して耕した。やがて声を同じくして互いに応じ、気を同じくして互いに求めるようになり、前の漢奸による侵界の謀とは比べものにならない。我ら子孫は幾世代にわたって伝え合い、務めて打里摺に社を扶けて同居し、永遠に墾耕させるべきである。決して酷薄にこれを取り戻そうとして、もめ事を起こして我々の盟約に背いてはならない」<sup>31</sup>）と結んでいる。

ここで特徴的なのは入植した平埔族が「均分墾耕」つまり集落を単位として公平に土地を分け与えられた点であろう。これは眉溪、南港溪からの取水においても配慮されており、結





【地図2】平埔族埔里開墾土地区分図（簡史朗「水沙連地区の族群と開発」より転引）



【写真1】埔里全景（虎頭山の旧隘勇線から望む。縦長の耕地区画が見える。筆者撮影）

果として埔里の開墾地は二つの河川を起点に縦長の土地区画が行われることになった<sup>32)</sup> (地図 2)。

埔里に入植した平埔族の最も早い事例は、1824 年に北投社からやって来た 27 人 (男性 20 人、女性 7 人) で、まもなく烏牛欄社から 200 人余りが移住したという<sup>33)</sup>。また『分墾蛤美蘭圖分名次總簿』は、1823 年から 1831 年にかけて埔里南部の福鼎金、守城份などの土地が北投社を初めとする諸社に分割され、さらに入植者個人に分け与えられた様子を語っている。中には毎年収穫から粟 5 斗を「関帝爺祝寿の費」として納めたという記録もあり、平埔族のあいだに漢文化が浸透していたことを伝えている<sup>34)</sup>。

いっぽう「自立安固公議名社約字」(1823 年) は、入植した平埔族が遵守すべき規則を取り決めている。そこでは開墾した耕地を「各社の番丁口灶に照らして丈量して均分」すべきこと、また「内山へ侵入して生番を擾動すること」「強きに恃んで弱きを挫くこと」「漢人を引誘して開墾させること」「漢人を傭雇して経営を行わせること」<sup>35)</sup> を禁止し、違反者は追放すると述べている。

これらの史料から窺われることは、埔里へ入植した平埔族が漢人の進出と耕地の奪取を警戒しながら、原住民をいたずらに刺激せず、集落あるいは住民の利害調整に配慮していた点であろう。「打里摺 (番親)」と表現された非漢人同士の緩やかな「われわれ」意識が成立していたことも注目を引く。

むろん開墾が進めば、利害の対立が生まれることは避けられなかった。伊能嘉矩によると、埔里社の「化番」だった澳漏 (後述する「番秀才」望麒麟の父親) は大肚城で 17 甲 (1 甲は約 1 ヘクタール) の耕地を開墾したが、彼の死後、平埔族の羅国忠はこれを奪おうと試みた。彰化岸裡大社の平埔族潘三彪もその耕地は自分の父親が拓いた功劳田であると訴え、訴訟は長引いて武力衝突に発展した。地方官は屢々仲裁を試みたが効果がなく、ついにこの耕地は公有地として没収されたという<sup>36)</sup>。

また平埔族が埔里の開墾を進めた期間も、「内山」地区への入植解禁を求める漢人の活動は続いた。1823 年に北路理番同知の鄧伝安は埔里を視察し、「良田千頃」が開墾可能であるが、「生番は深く耕すことが出来ない」「招かれて来た熟番も漢人のように地力を尽くすことが出来ない」と非漢人による開墾事業は効果があがらないと指摘した。また彼らが拓いた「新墾地」は 30 甲ほどで、「旧墾田 (郭百年らが拓いた耕地)」の十分の一程度に過ぎないこと、「いま熟番で山麓に集住している者は二十余家だが、なお以前民人が占築した土圀に借りて住んでおり、茅葺きの家に家具ようやく備わった」程度に過ぎないと報じた。さらに「その番居は寥落し、十室に及ばず」と原住民の衰退が著しいと述べたうえで、平埔族による開墾は「将来必ず成功しない」<sup>37)</sup> と望み薄であり、漢人による入植を許可するように求めた。

この時台湾府知府方伝燧の幕僚を務めていた姚瑩は、「埔里社紀略」の議論を踏まえて埔里への入植解禁は時期尚早であると批判した。史料はその理由について次のように記している。

道光三年（1823 年）、ついに万斗六社の革通事である田成發は、偽って埔里の社番に対して「外社の熟番を招いて護衛とし、荒地を与えて墾種する」ように持ちかけ、埔社はこれに従った。すると田成發は北投社の革屯弁（番屯の将校）である乃貓詩、革通事である餘貓尉と結び、付近の熟番を招いて開墾へ向かわせた。漢人は秘かにその後続き、熟番の開墾が成功するのを待って、涵入して侵占する計画を立てた<sup>38)</sup>。

これによれば、平埔族が入植した背後には漢人による耕地奪取の計画があったという。万斗六社と北投社は埔里入植の主力となった集落であり、すでに解任された通事、屯弁だった田成發、乃貓詩らは郭百年事件後も水沙連で影響力を持ち続けた黄林旺とよく似た存在であったと見られる。この時は田成發の仲間が水沙連の「社丁首（民兵首領）」だった蕭長發と対立関係にあったため、計画は見破られたが、外地出身の漢人が開墾請負人である「業戸」になることを申し出ると、鄧伝安は開墾の推進を主張した。結局姚瑩らがすでに漢人による入植が進んでいた噶瑪蘭厅（現在の宜蘭県）と埔里との条件の違いを指摘し、性急な開墾がもたらす弊害を説明すると、閩浙総督の孫爾準および他の地方官も従来通りの封禁策に同意したという<sup>39)</sup>。

次に「内山」地区への入植解禁を提案したのは台湾兵備道の熊一本であった。1841 年に彼は埔里を視察し、「条覆籌辦番社議」を提出した。そこで熊一本は「二十年来、熟番はすでに二千余人を超え、生番は僅かに二十人あまりが残っているに過ぎない。四里から茄、北木柵一带の平地で熟番に墾占されたのは約二千甲におよぶ」とあるように、平埔族の入植が進んで元々埔里に住んでいた原住民（埔番と眉番）を圧倒していることを指摘した。また嘉義県の阿里山、淡水厅の岸裡などから埔里へ入って「私墾」した平埔族が数百人おり、最早彼らを退去させることは出来ないので、土地の境界を定めたくて「常に照らして耕種させ、衆に随って陞科（課税）する」<sup>40)</sup> ように提案した。平埔族が漢人の進出によって居住地を失い、移動をくり返していた様子が窺われる。

また熊一本は「漢奸の私墾については、実にまた免れない。ただし（水沙連）六社のうち、ただ埔社（埔里）は時折漢人の私墾する者がおり、熟番の中に雑居しているが、その数は十戸を出ず、人数はなお多くない」<sup>41)</sup> とあるように、禁令にもかかわらず埔里へ入植した漢人がいたと述べている。この漢人は婿入りなどの方法を使って個別に平埔族の集落へ入ったと見られ<sup>42)</sup>、熊一本は平埔族の例に倣って所有地に応じて課税せよと述べている。水沙連全体について見ると、彼は水社で彰州系移民が「潜墾」した耕地を他人に小作させていたこと、新しく清朝の統治に従うことを申し出た原住民の集落 80 余村でも泉州系移民が耕地を「私開」していたと報じている<sup>43)</sup>。

ここで注目すべきは、熊一本が原住民の帰順が進み、埔里に清朝統治の出先機関を設ければ、水沙連の開墾を解禁することは可能だと主張している点である。彼は「各社で噂を聞いて土地を献げ、薙髪して熟番となることを願い、陸續として版図に入ることを申し出た者」



として、日本統治時代に武装蜂起することになる霧社など12の集落を挙げた<sup>44)</sup>。このように原住民の帰順が進んだことを強調する論調は1847年に水沙連を視察した閩浙総督劉韻珂の上奏文にも見られる。彼は次のように述べている。

（水沙連）六社の番情はまた大いに見るべきものがある。まさに私が南投へ到着しようとした時、田頭社の生番三、四十人が匍匐して出迎えた。入山した後も水裡、猫蘭、審鹿、埔里、眉裡（社の誤り）五社の生番があるいは十数人、あるいは数十人と時間を空けて跪いて迎えた。私の輿を見るや、先を争って手で挽き支えた。一つの集落で視察をするたび、生番たちは尽くその族衆を率い、道端にひれ伏してあえて仰ぎ見ようとはしなかった。その中には薙髪して、衣服と履き物を身につけている者が十の七、八であり、残りはなお髪を振り乱して裸足であった……。窮乏して苦しんでいる様子は、見るに忍びないものがあつた<sup>45)</sup>。

劉枝万氏が指摘しているように、当時水沙連一帯の原住民がここまで清朝の統治に従い、漢文化を受容していたと考えにくい<sup>46)</sup>。むしろこの光景はようやく実現した総督クラスの地方長官の視察が、開墾の許可へつながるように周到に準備された演出だったと見るべきだろう。また劉韻珂は「随行の台湾官役によれば、以前生番は人を殺し、毎年多い時は百人以上に及んだが、近一、二年は殺人も甚だ寥々とのことだった」<sup>47)</sup>と報じている。18世紀に漢人移民と原住民の対立によって犠牲となった嘉義県通事の呉鳳は、地方政府によって漢人の守護神として祀られたが、その過程で「出草（首狩り）」の終息は原住民の抵抗が下火になったことを示す重要な指標となった<sup>48)</sup>。つまり原住民に対する同化政策の成功を報じた劉韻珂の上奏は、「内山」地区における開発の解禁を求める台湾漢人社会の要求に応えるものだった。

だがこの時清朝中央政府は「国家が辺境を開闢するには、計画が周到で無ければならず、その軽々しく開闢を議論して後に災いを残すよりは、これまでの例に随って封禁し利益を前に留めるには及ばない」<sup>49)</sup>との理由から判断を先送りにした。その後漂着したアメリカ船の船員や宮古島の島民が原住民に殺された事件をきっかけに、清朝政府の統治が及ばない「化外の地」の存在が問題となった。そして1874年に台湾を「無主の地」と見なした日本が軍事介入（台湾出兵）を行うと、清朝の台湾政策は変更を迫られることになった。

1875年に船政大臣兼台湾督辦防務の沈葆楨は「内山」地区の封禁令を解除し、行政の出先機関である埔里社庁を置いて後に城（大埔城）も建設した。入植希望者を集めて開墾の費用や食糧を支給する招墾局が設けられ、埔里一帯の開発を積極的に進める「撫番開山」政策が行われたのである<sup>50)</sup>。

### 3. 望麒麟の登場と清朝の撫墾政策

さてこのように埔里の開発を求める漢人社会の圧力の中から登場したのが「番秀才」の称号で知られる望麒麟であった。すでに鈴木満男氏が明らかにしているように、彼は埔里に住んでいた原住民（埔蕃）の末裔であり、烏牛欄台地の黄望家に置かれていた位牌に「開基暨埔眉歴代高曾祖望公、媽仝神位」とあるのはその証拠であるという。この位牌の「長世（一世）」にある「大阿密」とは 1824 年に平埔族を入植させた埔里社土目の阿密のことであり、大肚城の開墾を進めた埔里社「化番」の澳漏は望麒麟の父親にあたる<sup>51)</sup>。また澳漏とその兄弟である篤律（埔里社番目の督律）は「長毛征伐」即ち北方タイヤル族の弾圧あるいは 1862 年からの戴潮春事件で「埔社屯丁」<sup>52)</sup>として従軍したが、途中体調を崩して死亡した。

望麒麟は 1861 年に生まれた。6 歳の時に父澳漏が亡くなると、母親の莫娘は恒吉城に住む漢人の楊姓と再婚した。この楊姓は子供がなかったため、望麒麟は彼の家で育てられ、やがて漢人が学ぶ私塾で「読書」をするようになった。そして 1882 年、21 歳となった彼は台南へ赴いて科挙を受験した。

この時台南府の役人は望麒麟が漢人風の名前を持っていないことに気づき、「私が名前をつけてやろう」と言って「キリンのようになる」という願いを込めて望麒麟の名を与えたと言われる<sup>53)</sup>。しかし彼は 1877 年に父親が遺した耕地の小作料徴収権をめぐる平埔族と争い、地方政府から「望麒麟らに永遠に小作料を受け取り管理させよ」<sup>54)</sup>という告諭を受け取っており、16 歳の時にはすでに望麒麟と名乗っていた。彼は急速に数を減らしていた「埔番」の若きリーダーとして原住民の利益を守る役割を担っていたことがわかる。

その後、望麒麟は 25 歳までに学生の身分を示す秀才の資格を獲得した。1886 年に記された史料によると「侑生望玉書即望麒麟」<sup>55)</sup>は「元々草地主の給主であったが、いま読書して入泮（秀才の資格を与えられること）し、小作料徴収のことを取り仕切った」<sup>56)</sup>と記されている。侑生とは受験生の中で「音律に通曉し、礼儀を習得」した者に与えられるタイトルであった。この結果、府試などの試験を免除された望麒麟は「番秀才」と呼ばれるようになった。

さて清朝が「撫番開山」政策に転じると、多くの漢人が埔里へ入植するようになった。すでに 1850 年代に泉州系移民の鄭勒先は平埔族と交渉のうえ埔里への入植を始めていた<sup>57)</sup>。また日本統治時代の調査によると、漢人移民が集中して入植したのは 1877 年から 1881 年までの数年間で、広東潮州や福建省永春県の出身者が多かった。また彰化県の東勢角（社寮）、苗栗県から入植した客家系の人々もあり、移民の数は少なくとも 200 人を超えた。

例えば 1878 年に広東潮州から「招墾」に応じてやってきた劉阿勒らは大肚城に、黄阿七らは史港坑へ入り、亀子頭などへ再移住する者もいた。また永春県からやってきた蘇黄らが東部の五泉港へ入植すると、周囲は原住民居住区に近いことを理由に他の場所へ遷るよう勧めたが、彼らは「海を越えてはるばる危険を冒してやって来たのだ。生番など恐れてどうする」と言って聞き入れなかった。はたして蘇黄親子は「出草」の犠牲となり、残りの者は

慌てて大肚城へ逃げ戻ったという<sup>58)</sup>。

ちなみに現在埔里鎮の南村里には広東潮州からの客家移民が建てた「義民祠」が現存している。その碑文によると、1879年に牛相触莊の「粵籍」漢人が付近の「粵籍墾民」の守護神として、竹北二堡の枋寮（現在の新竹県新埔鎮）にあった褒忠廟義民祠から分祀する形で建設したという<sup>59)</sup>。また埔里で最も早く媽祖信仰を持ち込んだのは平埔族であったと言われるが、現在埔里鎮清新里の恒吉宮にある媽祖像は彰化県鹿港から分霊したもので、1887年に厦門商人の陳瑞芬が彼の商行（恒吉行）の敷地を提供したのが始まりとされる<sup>60)</sup>。埔里へ入植した漢人移民が生活基盤を築きつつあった様子が窺われる。

1879年に清朝は効果が限定的だった招墾局を廃止し、清仏戦争後の1885年に新たに撫墾局を設置した。その目的について初代台湾巡撫の劉銘伝は次のように述べている。

現在勅命を奉じて台湾に巡撫を設けるのであれば、必ず土番を次第に招撫して感化させることが必要である。内患を除いてから辺疆を拡大し、招墾すれば土地と人民は日ごとに漸く広がり、多くはおのずから一省をなすことができる。調べたところ生番の情形は雲貴の苗民、甘肅の回番とは大きく異なる。台湾の生番は統属に帰さない。各番社の占領している土地は地味に肥え、高山は茶、平地は穀物の栽培に適している。もし彼らを帰化させて農耕を教えれば、みな豊かな地域となる。

以前の招撫政策は空しく大金を費やしたが、処置が真面目でなかったため、帰順させた後はこれを捨てて問わなかった。台南の番社は投降した者こそ多いが、声気は依然として隔絶したままで、仇殺すること元の如くである。私が思うに、もし真剣に招撫して威信を示せば、五年のうちに台湾全土の生番は全て帰化させることが出来よう<sup>61)</sup>。

ここで劉銘伝は台湾の原住民が清朝の統治に服さないため、彼らを確実に帰順させて同化政策を進め、その居住地の開発を進めることが台湾の経営において肝要であると述べている。1887年に台湾全土を統轄する撫墾総局が大嵙崁（現在の桃園市大溪区）に置かれると、埔里にも撫墾局が設けられ、中路軍統領として劉銘伝の信任を得ていた霧峰林家の六代林朝棟が代理通判、辦理撫墾事務となった<sup>62)</sup>。撫墾局の任務は通事の設置、原住民に対する農耕の指導、義塾や教化堂の設置による原住民子弟の漢化、医者および剃頭匠の派遣による衛生と習俗の改変などであった<sup>63)</sup>。また林朝棟のもとで「北番」（北部に住むタイヤル族）に対する招撫政策を進めた営帶埔里社兵備兼委員辦庠治の王九齡は、「埔里社撫番章程」の中で次のように述べている。

一、帰化した生番は良く待遇すべきである。生番は内山に住み慣れ、木と石の家に住んでおり、人並みの衣食は日頃見たことがない。いま恩に感じて帰順してきたのは、鄙びた習俗を棄てて文明に向かわせる好機である……。そこでもし番人が山を出てきた時

は、すでに帰順している者であれ、投降しに來た者であれ、均しく通事から打ち解けて親しくし、厚い褒美をもって誘うべきである……。社寮（用意した小屋）に番人が一日滞在したら、薙髪しているか、再び來たかにかかわりなく、一人あたり毎日食費として一百文を与えよ……。

一、薙髪をする職人を置いて化と番を分けさせよ。生番は内山に生まれ育ったため、短い髪を尊ぶ習慣がある。髪が伸びると必ず短く切ってしまう。乱れた髪に垢まみれの顔で、依然として薙髪していない者と変わらない……。そこで薙髪職人を二名置いて毎月一人銀五元を与え、撫壠局に常駐させて山を下りた番人が薙髪し易いようにする。すでに薙髪した番人は、半月に一度髪を剃らせる。さらに通事から各番目を通じて社番に伝え、留めるべき髪を剪ることを許さない。もし剃った髪が伸びたら、期限までに局へ赴いて剃らせる。このようにすれば撫化したかどうかは判然と区別され、その同類と一緒にすることはないだろう。

一、義塾を設けて教化せよ。生番は深い巖穴に住んでおり、民と通じない。見るもの習うものはみな獠蛮强悍（野蛮で強悍）な事であり、禽獸と異なるところは人間の形をしているに過ぎない。その詩書や礼節、計算や秤で量ることは、概ねいまだ知らないが、番童（原住民の童生）はここに生まれ育ったので、ついに習慣となってしまう。まことに閣下が言われる通り、「生番を帰順させることは難しくないが、教化することは難しい。必ず子弟を入学させて初めて、その気節を変えることができる」のである……。

そこで義塾一カ所を設け、通事に命じてすでに帰順した近くの番社から番童で年齢が若く優秀な者を選び、番目に入学させて授業を受けさせよ。塾の教師は必ずしも文理に通じている必要はなく、番語に通じ規範に合った者を用いればよい。およそ初めて番童を教えるのは、漢字とその読み方を知るに過ぎないが、将来効果が上がれば課程の内容も進み、番童の知識も次第に開けるであろう……。その塾教師の報酬は毎月五元とし、塾で学ぶ番童には一人あたり規定に基づいて銀三元を支給し、衣服や食事、紙や筆硯の費用とする……。

一、教化堂を設けて鄙びた風俗を変えよ。生番は野性がいまだ馴れず、人々は強悍を尊ぶ。その性質を変えようと思えば、建物を作って教えるのでなければうまくいかない……。以前私が勇を率いて興安（江西省か）に駐屯していた時、県内には教化堂が設けられ、毎月朔望あるいは三八の日に、必ず紳耆が堂において勸化を行い、聖諭広訓を読み上げた後に善惡の解説を行っていた。もとより愚かな説法であるが、年月をかけてこれを行えば庶民も聞く耳を持ち、災いは悪行を積み重ねた結果であることを知って、邪念も消えることだろう……。

そこで社寮に教化堂を設け、もし生番で交易のために山を下り、小屋に宿泊する者がいれば、隨時これを教え導くことができる。まずは義塾の教師に先行して行わせ、もし



効果があったら定例とする……。期日を決めて聖諭廣訓の宣講を行い、勸番書および番書を頒布してその解説を行えば、撫務に大きな利益があるばかりか、民事においても効果がある<sup>64)</sup>。

ここでは帰順してきた原住民に報酬を与えて手なづけ、薙髪させた後も定期的に髪を剃って投降に応じない者と区別できるようにすること、義塾を設けて原住民に初等教育の機会を与え、また教化堂を設けて儒教的規範の注入と善書の普及を図ることなどを述べている。山上にいる原住民を平地へ招き寄せ、漢人風の髪型に変えたうえで儒教「文明」化を図るという同化政策は、大陸の周辺民族地域でもくり返し見られた発想であった<sup>65)</sup>。それは淮軍出身の劉銘伝の実施した改革が西洋近代文明の移植ではなく、むしろ儒教的理念の実現をめざす近代化事業であったことを物語っている<sup>66)</sup>。また撫墾政策に従った原住民への奨励金や熟教師の報酬について具体的な金額が記されている点もこの史料の特徴で、王九齡の提案に対する劉銘伝の指示も埔里社庁と協力して実施せよという内容だったが、結局効果を上げずに終わったという<sup>67)</sup>。

原住民の末裔でありながら、いち早く漢文化を受容して「番秀才」となった望麒麟の活動は、清朝政府がめざした台湾統治の方向性を先取りするものだった。ただし劉銘伝の撫墾政策は台湾から政府の統治権力が及ばない「化外の地」を消滅させ、開発を進めることで辺境防衛に必要な経費を捻出することに目的があった。林朝棟も樟腦生産の拡大に抵抗する原住民や土地丈量に不満を持った漢人有力者の抵抗（施九緞事件）を弾圧することに追われ<sup>68)</sup>、移民の流入による社会変動の中で没落の危機にあった原住民を救済する余裕はなかった。

#### 4. 「亢五租」をめぐる抗争と望麒麟の死

この過程を示すのが埔里の「亢五租」をめぐる長い抗争であった。亢五租は空五租とも言い、原住民の所有地を開拓した平埔族の佃戸（小作人）が収穫の5%を納める「番大租（原住民に納める小作料）」の一種であった。すでに見たように、望麒麟の父である澳漏は亢五租の徴収をめぐって平埔族らと争い、父親の死後は「遺された田畑はみな他人に占管され、現在埔社の生番は僅かに男婦幼小六人、眉社はただ一人を残すのみ。零丁孤苦、自らを養う財産は全くない」<sup>69)</sup>と困窮した。この対立は望麒麟の代になっても続き、1878年に中路理番同知の孫継祖が彼に与えた諭告には次のように記されている。

埔眉の化番給主である望麒麟の申し立てによれば、小作料の徴収を管理していた埔社地方は、かつて七十二社の屯番が耕すべき田がないため、彼らが埔里へ移住することを許し、共に地域を守って凶番の攻撃を防いだ。溝南（北埔）の熟田である八股、九股などの土地を彼らに与えて耕作させ、田園かどうかを論ぜず、毎年一車（10石）あたり五斗の小作料を受け取り、長年変化はなかった。ところが近年は滞納が多くなったの

で、これまで通り納めるように示諭を出してほしいとのことだった。

査するに望麒麟は七十二社の屯番が貧困に苦しんでいたため、田園を分け与えて耕作させた。納めるべき小作料はまさに規則通り納入すべきであり、どうして滞納してよいものだろうか……。これらの屯番で望麒麟が与えた溝南北埔の八股、九股などの土地を耕作している者は、田園を論ぜず、毎年収穫した穀物百擔につき五擔を〔望〕麒麟に徴収させるべきである<sup>70)</sup>。

ここでは望麒麟の祖父が平埔族に開墾させた耕地の小作料（亢五租）を、平埔族が滞納していた事実が記されている。この情況は地方政府の調停によっても変わらず、翌年の告諭では東角の総理余清源が「官の命令に従わず、大胆にも勢いに恃んで、勝手に書類を出すなど私欲をほしいままにした。昨年秋の小作料をわが物とただけでなく、今年夏と秋の収穫についても至るところであえて抵抗を試みたため、〔望麒麟〕は小作料を受け取ることが出来なかった」<sup>71)</sup>とあるように、平埔族が実力で小作料の納入を拒否したことがわかる。

その後も亢五租をめぐる紛糾は収まらなかったが、1887年に台湾の税制が改められると、亢五租は全て政府が管理することになった。平埔族から1甲につき1石8斗を徴収し、ここから7斗5升を望麒麟に与え、残りの多くは義学の経費に充てられることになった<sup>72)</sup>。その前年に出された諭告も「侑生」の身分を取得した望麒麟に対して、恒吉城の水田50甲は長年平埔族の「覇耕」が続いたので、これを「充公」即ち官有地としたうえで、「佃首」である謝細苟らから200石の小作料を望麒麟に納入させることにしたと述べている<sup>73)</sup>。彼が「秀才」の資格を通じて地方政府に働きかけたことが有利に作用したことが窺われる。また1880年に望麒麟が余清源らと小作料徴収の方法を取り決めた文書には「依口代筆人」として黄利用なる人物の名が記されている<sup>74)</sup>。この黄利用は漢人の読書人で、彼の息子である黄敦仁は望麒麟の娘である望阿参と結婚し、漢人と原住民の「合成家族」である黄望家が生まれることになる。

1895年に日清戦争が終わると、下関条約が締結されて台湾は日本に割譲された。6月に日本軍は基隆を占領し、鹿港出身の豪商である辜顕栄らの先導のもと台北へ無血入城した。8月に日本軍は彰化県城を占領したが、雲林県や南部鳳山県の客家人居住区である六堆で住民の激しい抵抗を受けた。10月に黒旗軍首領で台湾民主国を率いていた劉永福は厦門へ逃れ、日本軍は台南へ入城して戦闘の終結が宣言されたが、1896年に入っても雲林県東部の大坪頂（鉄国山）を拠点とする簡義、柯鉄らの抵抗運動が続いた<sup>75)</sup>。

こうした中で望麒麟は黄利用と共に日本軍の陣地を訪ねた。北溪隘勇線の管帯（首領）だった林榮泰は日本軍を埔里へ無血入城させることを模索しており、望麒麟らはその交渉を行ったと見られる。だが1895年8月18日に望麒麟は殺害された。手を下したのは6人の平埔族で、北港溪の日本軍駐屯地へ単身で向かった望麒麟を殺してその首を取り、原住民の犯行に見せかけた。背後にいたのは埔里の漢人地主だった張省三で、日本軍侵攻の混乱に乗じ



【写真 2】黄敦仁と望阿参（醒霊寺の文献室に残る日本統治時代の写真。筆者撮影）

て亢五租の権利をもつ望麒麟を殺せば、開墾地の利益を拡大出来ると考えていたという<sup>76)</sup>。

望麒麟の死後、残されたのは妻の莫氏玉と 10 歳の娘である望阿参、まだ 4 歳になったばかりの養子の望雲奇の 3 人だけだった。そこで 1899 年に莫氏玉は望麒麟と親しかった黄利用を頼り、彼の息子だった黄敦仁を望家に婿入りさせた。台南生まれの黄利用は望麒麟よりも 5 歳年上で、台南や台中、埔里の烏牛欄社で長老教会の小学校教読（教師）を務め、1891 年からは埔里社北路協鎮府の秘書官となった。黄望家の成立後、黄敦仁は台湾総督府から与えられた亢五租の補償金を資本として開源公司を設立し、苗栗県の客家人を雇って開墾事業を進めた。また彼は開墾に必要な水源の確保に努め、6 カ所の井戸を掘ることに成功したという。黄敦仁、望阿参夫婦は 12 人の子供をもうけ、長男の望阿福に望姓を継がせた。また黄敦仁は保正や埔里街協議会員を担当するなど、日本統治時代の埔里の地域リーダーとして活躍した<sup>77)</sup>。開発や統治の安定という大義名分のもと次々と立ち現れた外来の諸勢力を前に、埔里の人々はそれらを受け容れつつ、自らのものとして活用するしたたかな生存戦略を磨き上げていったのである。

## おわりに

2024 年 3 月に筆者は埔里鎮鉄山里の望麒麟故居（黄望古厝）を訪ねた。実はここを訪ねるのは初めてではなく、1998 年 12 月に台湾大学歴史系教授だった呉密察氏が指導教官の小島晋治先生（東京大学教養学部）と元ゼミ生を台湾へ招き、私もその一員として望麒麟の故居を見学したのである。当時は黄敦仁の末の息子にあたる黄大繆氏が存命であり、高雄の海軍武官府に軍属として入り、マニラで揚搭作業を担当されたとのことだった。小島先生は戦後間もなく中国史研究を始められ、現地でのフィールドワークなど望むべくもなかった世代



【写真3】望麒麟故居（鉄山里黄望古厝、筆者撮影）

に属する。黄大繆氏が海軍での勤務経験があると流暢な日本語で話されるのを聞き、「あなたは海軍ですか、私は陸軍の学校を出ました」と嬉しそうに語っていたことを思い出す。

望麒麟故居は清末に立てられた閩南風の三合院住宅である。入り口の門には秀才を出した家であることを示す「玉衡献瑞」の四文字が掲げられている。この住宅は埔里の大埔城を築いた台湾鎮総兵吳光亮の協力によって立てられたもので、中庭を囲むように立つ建物の正庁には「爽氣引薰風」の文字があり、窓上の壁には以前の埔里一帯の風景が描かれていた。この建物は1917年の埔里大地震および1999年の9.21地震（集集大地震）で被害を受けたが、現在の当主である黄泗山氏が地道な修復作業を進めた。当時埔里の高級工業職業学校で国語教師を務めていた黄泗山氏は絵心があるだけでなく、盆栽の専門家としても知られる。正庁の裏側はどこか日本風家屋を思わせる板の外壁で、よく手入れされた庭園が広がっていた。また黄泗山氏は声楽の嗜みもあり、我々が訪問した時はオペラの曲を歌って歓迎してくれた。様々な文化を熱心に学び、わが物としてきた望麒麟の子孫であることを痛感させられた。

1998年に私たちが埔里を訪問した時は、続けて望麒麟故居の近くにある台湾長老教会の愛蘭教会を訪ねた。この教会は1871年に平埔族のパゼツヘ族青年だった潘開山武幹が狩りの最中にケガをして、台南で宣教師の治療を受けたことをきっかけに村ぐるみで入信したことで知られる<sup>78)</sup>。埔里のキリスト教信者は多くが平埔族で、漢人の黄利用は信者ではなかったが、愛蘭教会の前身である烏牛欄教会で教読を務めたことがあった<sup>79)</sup>。黄望家もプロテスタント教会と一定のつながりを持っていたと見られる。

むろん望麒麟の足跡を見ても明らかなように、黄望家の歴史は埔里で利益の拡大をめざす様々な勢力との抗争の歴史でもあった。これを示すのが愛蘭台地の水の利用をめぐる埔里酒



廠との争いである。埔里は陳年紹興酒など台湾有数の酒造地として知られる。その草分けは1912年に蘇逢時らが建てた埔里社酒造株式会社で、1922年に台湾総督府が酒の専売制を実施すると、埔里に専売局の出張所を設けて埔里酒工場とした<sup>80)</sup>。埔里の醸造業は愛蘭台地の良質な水を利用したものだったが、ここは元々黄敦仁が開墾のために井戸を掘った場所で、戦後も埔里酒廠は黄望家に水の使用料を支払っていた。だが酒廠側は使用料が高すぎると考え、別に水源を拓こうとして争いになった。

この頃愛蘭台地に住む平埔族も水をめぐって苦しんでいた。彼らは近くを流れる南烘溪から水を得ていたが、河辺から水を台地まで運び上げる作業は厳しく、これを担う女性の負担は重かった。そのためパゼツヘ族の青年はなかなか妻を娶ることができなかった（これを「無某崎」という）。すると埔里酒廠は1968年に独自の水源から湧き出た愛蘭紹興水を溜めたコンクリート製の塔を「無某崎」階段を上った場所に作り、これを工場および鉄山、愛蘭里の「民衆専用」——当然ここには黄望家は含まれない——としたという<sup>81)</sup>。

また開拓の歴史は水利や灌漑の歴史でもある。埔里の南の山麓に位置する水頭里には、1826年に頭目金龍に率いられた北投、南投2社の平埔族が拓いた南烘圳が残されている。彼らは水頭社、十一份に入植したが、ここは原住民の居住区に近く、しばしばその襲撃を受けた。日本統治時代にやってきた水利技術者の南烘圳に対する評価は高くなかったが、ここを流れる水是水頭里だけでなく北の枇杷城、梅仔脚、茄苳脚、生番空、大肚城の耕地を潤したという<sup>82)</sup>。

さて平埔族が入植して開発を進めた埔里東側の蜈蚣崙には「平埔族番祖廟」が存在する。2017年に立てられた碑文によれば、この地の平埔族は自分たちの由来に関する伝承を持たず、醒靈寺（ここには日本統治時代の能高神社から移された狛犬と灯籠が現存している）の神に「請旨」即ちお告げを求めた。すると神は彼らがカハブ（噶哈巫）族であり、「雅維茲泰洋」なるリーダーに率いられて台中から埔里へ入植したと回答した。そこで人々はカハブ族の男性神である番太祖（apu Dadawan）を自分たちの「原始鼻祖」として祀るようになった<sup>83)</sup>。平埔族であったカハブ族は現在も原住民に認定されておらず、自分たちの言語や文化の復興に取り組んでいる。彼らの活動は民主化が進行する中で盛んとなった台湾原住民族運動の一環として捉えることが出来よう。

また埔里では恒吉宮（媽祖廟）およびその脇に建てられた孔子廟を訪問した。我々が恒吉宮を参観していると、別な媽祖を奉じた一行が廟の敷地にやってきた。これは埔里の日南天后宮にある媽祖像で、雲林県北港朝天宮の北港媽、彰化県鹿港護聖宮の玻璃媽と共に地域一帯を見回る「遶境」を行っていた<sup>84)</sup>。ここで日南とはタオカス族の集落（後龍五社）のことで、彼らは1860年頃に台中の大甲から林阿蓮に率いられて埔里へ入植した。この時ある漢人移民が媽祖を持ち込み、タオカス族はこれを自分たちの守護神として受容したという<sup>85)</sup>。

ちなみに恒吉宮の媽祖像も「九月迓媽祖」と呼ばれる遶境を行っている。1897年に埔里が干ばつに見舞われると、恒吉宮の媽祖が鹿港の媽祖と共に水路を見回りしたいとお告げを



【写真4】埔里恒吉宮媽祖廟（清新里、筆者撮影）



【写真5】恒吉宮の「大正甲子年（13年、1924年）」と刻まれた匾額（筆者撮影）

降した。そこで旧暦八月末に二体の媽祖像を担いで東螺圳から観音瀧、九芎林を回ると、はたして九月初一日に枯れていた水源から水が湧いた。これに驚いた人々は毎年旧暦九月に媽祖像の「遶境」を行うようになった。日本統治時代も「遶媽祖」は行われたが、埔里出身の作家である巫永福の回想によると、当時は専ら鹿港、彰化の媽祖を招き、約一ヶ月をかけて埔里の各集落を巡回した。この間に外地の来客をもてなす宴会が催され、漢人移民の入植を促した。また平埔族の集落も「遶媽祖」に参加することでその信仰圏に組み込まれ、彼らが本来持っていた信仰や習慣は希薄化したという<sup>86)</sup>。



【写真 6】 埔里昭平宮育化堂孔子廟（奥で扶鸞が行われている、筆者撮影）

このように見ると、元々原住民や平埔族の居住地だった埔里で媽祖信仰が盛んになったのは、彰化平原の漢人文化が移植され、これを受け容れた原住民族との間に社会の融合が進んだ過程を示していると言えるかも知れない。

むろん本稿が触れた郭百年事件に示されるように、埔里における漢人と平埔族、原住民との関係は緊張に満ちていた。これをよく示すのが同声里にある義女廟で、天水夫人を祀っている。一説によると彼女は日月潭付近の水社に住むサオ族の娘で、漢人の妻となった。やがて漢人の埔里入植が始まると、彼女は漢人と平埔族の橋渡しを務めたが、ある日平埔族から嫌疑をかけられた漢人商人を守ろうとして人質となった。ところがこの漢人商人が約束の期日までに戻らなかったため、彼女は平埔族に殺されたという。その後 1914 年に埔里が天災に見舞われると、紳士の羅金水が義女祠を建てて天水夫人を祀った<sup>87)</sup>。漢人と原住民族との板挟みとなり、犠牲になったというストーリーは呉鳳を想起させるが、義女廟の規模はささやかで、なくし物をした時に希求すると霊驗があるという。総督府によって立派な廟が建てられ、公学校の教材に取り上げられた呉鳳のように徹底した政治利用は行われなかったようである。

最後に埔里の孔子廟について述べたい。恒吉宮の脇にあるこの廟は昭平宮育化堂といい、創建の時期は日本統治時代の 1912 年とかなり遅い。当初の名前は「修化堂」で、孔子像は祀っておらず、台中から持ち込まれた関帝像を主神としていた。1926 年に拡張工事が完成すると「育化堂」と名前を変え、孔子像を主神に加えて廟の前殿に祀った。いっぽう関帝は呂祖師（呂洞賓、道教の仙人）、司命真君（灶神）と共に廟奥の後殿に祀られたが、この三神は「三恩主」といい、台湾で広く見られる鸞堂の神々である<sup>88)</sup>。

鸞堂は扶鸞を行う場所のことで、日本の「こっくりさん」に似た一種のシャーマニズムが

行われる。育化堂は埔里で3番目の鸞堂とのことだった。扶鸞の主宰者は儒教的素養をもつ読書人で、普通鸞手と呼ばれる術士2人でV字形の棒を持って砂の上に漢字を記す。唱鸞と呼ばれる助手がこれを読み上げ、別の者が記録する。こうして記された託宣は漢詩の形をとり、読書人が解説を説き聞かせる。例えばそれは次のようなものであった。

副主席、到詩

甲辰年（2024年）正月二十七日戌時（陳〇〇扶）

羊毛出在羊身上（羊毛は羊の身体の上に生える）

天下必無免費餐（天下にタダの食事はない）

由此推研終損己（これによって推研すればついにはおのれを損なう）

借牌方法感虚嘆（借牌の方法は虚しい嘆きを感じる）

この詩が記されると、春酒が準備されて一同で飲み、講話が行われる。その内容は現在廟の支出が増えているが、「借牌（借金?）」はよい方法とは言えず、それぞれの方法を用いて「招標（入札）」を行うべきというものだった<sup>89)</sup>。

この扶鸞の起源は六朝時代に遡るといい、明代以降は読書人が中心となって関羽など道教系の神々を降臨させることが多かった。こうした扶鸞の託宣に基づいて社会活動を行う扶鸞系結社は「善堂」と呼ばれ、台湾、日本で多くの研究があるが<sup>90)</sup>、本稿で取り上げた内容で関連するものは民衆教化を目的とした教化堂であろう。清代には読書人が人々を集めて『聖諭広訓』を読み上げ、その内容を解説する宣講が広く行われたが、いっぽうで人々の切実な願いに応えることが社会の安定と統合に役立つと考えられた。埔里育化堂では旧暦七、十七、二十七日に扶鸞が行われたと聞くと、前殿に公権力に好印象を与える孔子像を配置し、後殿に読書人が人々の悩みに寄り添いつつ社会教化を行う扶鸞の場が設けられたのは、廟信仰がもつ複雑な性質を浮かび上がらせている。

この鸞堂については、今回もう一つの調査地であった屏東県の六堆地区でも見る事ができた。その詳細については稿を改めて論じることにした。





【写真 7】 埔里の義民祠（客家の祀る義民爺廟（旧廟）の写真、筆者撮影）



【写真 8】 平埔族が引いた南烘圳（水頭里、筆者撮影）

## 註

- 1) 菊池秀明「清代台湾における廟信仰と公権力」(国際基督教大学『アジア文化研究』50号、2024年)。
- 2) 一般に台湾の先住民族は原住民と表記されるが、戦後平埔族は漢族に編入され、原住民は高山族即ち日本統治時代に高砂族と呼ばれた人々に限定して用いられた(本稿で登場するサオ族は原住民として認定された平埔族の数少ない例である)。本稿は高砂族については原住民を、平埔族、高砂族の双方を指す場合は非漢人または原住民族の語を用いる。
- 3) 族群は初め原住民のグループ分けに用いられた概念だったが、やがてエスニック・マイノリティである彼らと漢民族との関係を語る用語として使われた。また漢人内部の諸集団、とくに戦後台湾へやってきた外省人と日本統治時代までに台湾に定着した本省人との関係を族群関係と見なすかについて議論が戦わされた。現在は多文化主義の前提に立ち、福佬系、客家系それぞれの漢族、原住民、外省人を「四大族群」と呼ぶ一方で、それらのグループを包摂する概念として「新台湾人」が用いられるという(王甫昌「現在台湾における族群概念の含意と起源」『日本台湾学会報』10、2008年および田上智宜「多文化主義」、若林正文、家永真幸編『台湾研究入門』東京大学出版会、2020年)。
- 4) 初版1952年、のち劉枝万著作集の一部として南天書局より2019年に再版。なお再版本には劉枝万氏の伝記を含む簡史朗「『台湾埔里郷土志稿』導読」が収められている。
- 5) 未公刊。他に鈴木氏の著作として『マレビトの構造——東アジア比較民俗学研究』三一書房、1974年、『華麗島見聞記——東アジア政治人類学ノート』思索社、1977年および『日本人は台湾で何をしたのか——知られざる台湾の近現代史』国書刊行会、2001年。
- 6) 簡史朗、曾品滄編『水沙連埔社古文書選輯』国史館、2002年。簡史朗『水沙連眉社古文書研究專輯』南投県政府、2005年。また前者所収の簡史朗「埔社古文書導読」、後者所収の「眉社古文書導読」および簡史朗「水沙連地区的族群與開発」(呉三連台湾資料基金会、2015年)。
- 7) 邱正略「清代中部台湾平埔族拓殖研究」私立東海大学(台湾)歴史研究所碩士論文、1992年(未公刊)。同『日治時期埔里的殖民統治与地方発展』花木蘭文化出版社(新北)、2016年。同「埔里盆地的水利發展(1815-2017)」(国立彰化師範大学歴史研究所編『白河歴史地理学報』18期、2017年)。
- 8) 洪麗完『熟番社会網絡與集体意識——台湾中部平埔族群歴史変遷(1700-1900)』聯経出版(台北)、2009年。
- 9) 葉育倫「水沙連的族群壟殖過程——以清代埔里爲例」(『史轍：東呉大学歴史学系研究生学報』第5期、2009年)。
- 10) 鄧相揚「平埔族群拓殖眉社群伝統領域的初探」(潘英海主編『劉枝万与水沙連区域研究』華芸學術出版、新北、2014年)。
- 11) 2024年訪問記録。国家文化資産網、大馬璘考古遺址(<https://nchdb.boch.gov.tw/assets/overview/archaeologicalSite/20091030000002>)。また鳥居龍蔵の埔里における調査については、清水純『画像が語る 台湾原住民の歴史と文化』風響社、2014年および徳島県立鳥居龍蔵記念博物館、鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』思文閣、2020年。清水純氏の著書は埔里の望黄氏一家について「最後の原住民」という視角から分析を加えている。
- 12) 伊能嘉矩『台湾文化志』下巻(刀江書院、1928年、復刻版、1965年)、第14篇、拓殖沿革、第1章、制限開拓の一期、324頁。
- 13) 伊能嘉矩同上書、下巻、第14篇、第1章、277頁の水沙堡の項。また林圯による水沙連への進

出については、前掲の鈴木満男博士論文、66 頁が言及している。

- 14) 伊能嘉矩同上書、下巻、第 15 篇、番政沿革、第 6 章、征番事略、第 2 節、水沙連番の討伐、828 頁。
- 15) 孟祥瀚「藍張興莊與清代台中盆地的拓墾」『興大歷史學報』17 期、2006 年。なおここで漳州系移民を率いた藍廷珍は『平台紀略』『鹿洲公案』の著者である藍鼎元の族兄であった。藍鼎元は藍廷珍の幕僚として台湾へ渡り、「紀水沙連」を記したが、彼自身は水沙連を訪ねたことはなく、この文章は康熙『諸羅縣志』などを参考に想像を交えて作成された紀行文だった。またその内容は「帝国の視点」に基づいて台湾原住民を描写した一種のオリエンタリズムであったという（顧敏耀「藍鼎元伝記資料考述——兼論其〈紀水沙連〉之内容與意涵」、国立成功大学中文系『成大中文學報』第 42 期、2013 年）。
- 16) 道光『彰化縣志』巻 11、雜識志、兵燹。また陳哲三「水沙連之役及其相關問題」逢甲大学人文社会学院『逢甲人文社會學報』第 18 期、2009 年。
- 17) 貓霧揀巡檢の設置については道光『彰化縣志』巻 3、官秩志、文秩。また伊能嘉矩によれば、1734 年に沙連堡、集集堡などの各堡を包括する水沙連堡が置かれたという（伊能前掲書、下巻、第 6 章、830 頁）。
- 18) 土牛、土牛界線ともいう。「台湾民蕃界址図」中央研究院民族文化研究所、歴史文物陳列館 (<https://museum.sinica.edu.tw/collection/19/item/75/>)。またこの図を活用した成果として柯志明『番頭家——清代台灣族群政治與熟番地權』中央研究院社会学研究所、台北、2001 年がある。
- 19) 伊能前掲書、下巻、第 15 篇、番政沿革、第 4 章、屯制、720 頁。この時水沙連の「化番」通事だった黃漢は、大里杙莊を奪われて内山地区を転戦していた林爽文軍の追撃で功績をあげた（同書上巻、第 4 篇、治匪政策、第 2 章、匪乱各志、825 頁）。
- 20) 彰化県では通事が漢人を招いて内山地区で「搭寮私墾」したり、平埔族の耕地を「侵越」して集落を形成する例が見られた（鍾音奏、乾隆二十二年二月二十五日批、中国第一歴史檔案館蔵、軍機処奏摺録副、民族類、634 号、柯志明前掲書 382 頁所収）。このため清朝は当初南投街付近を通っていた境界線を 2 キロほど東の万丹一帯へ移動させた。
- 21) 柯志明前掲書 163 頁。またこの時現地を視察した総兵李有用によれば、水沙連は「番民雜処」で 24 の集落があり、2,000 人余りが住んでいた。開墾された耕地も 1571 甲に及んだという（李有用奏、乾隆十六年四月、国学文献館編『台湾研究資料彙編』聯経出版社、1993 年、12493-12499 頁）。
- 22) 佚名「埔里社紀略」によると、1788 年に番屯制が敷かれた時、水里、埔里二社には屯田 100 余甲があり、他に原住民が自ら耕す耕地が 100 甲あったという（姚瑩『東槎紀略』巻 2）。だが道光『彰化縣志』は集集埔莊の租穀 379 石を屯租として挙げているだけで、屯兵については言及していない。また伊能前掲書、下巻、第 15 篇、番政始末、第 4 章、屯制、732 頁に嘉義県の柴裡社が「水沙連に接近し民番雜処」しているため一小屯を置くべきであるとの議論があり、柴裡小屯には阿里山社、西螺社などと並んで水沙連社から 90 名の屯丁が置かれたとある（同書 735 頁）。
- 23) 佚名「埔里社紀略」。また李文良『契約與歷史——清代台灣的墾荒與民番地權』台大出版中心、2022 年、205 頁。なお邱正略「埔里社紀略の史料価値」（『台湾古文書学会会刊』19、20 期、2017 年）によると、「埔里社紀略」の作者は姚瑩自身ではないという。以上は邱正略氏の教示による。記して感謝したい。
- 24) 佚名「埔里社紀略」。また伊能前掲書、下巻、第 14 篇、拓殖沿革、制限拓殖の一期、326 頁。な

おこの事件によって埔里の原住民は十数人まで減ってしまったという。

- 25) 劉枝万『台湾埔里郷土志稿』第六章、漢族之移住、269 頁。それによると亀仔頭の碑文は「原（願）作生番屬、不造漢民巢」とあり、王得祿（嘉義県太保人）が管理した。また集集のそれは「嚴禁不容奸入、再入者斬」とあり、劉仁明が管理したとある。
- 26) 鈴木前掲論文、80 頁によると、1819 年に濁水溪南岸の社寮に建てられた廟の油香碑には「施主、水沙連社通事、社丁黃林旺等」と記されていた。
- 27) 佚名「埔里社紀略」。また伊能前掲書、下巻、第 14 篇、拓殖沿革、制限拓殖の一期、326 頁。
- 28) 劉枝万前掲書、206 頁。この史料は日本の人類学者である移川子之蔵が 1931 年に台北帝国大学土俗人種学研究室、南方土俗学会編『南方土俗』に発表したもので、水頭社の陳石来氏が所蔵していたが、その後原件は失われた。また鈴木前掲論文、23 頁参照。
- 29) これらの平埔族は現在も原住民に認定されていない。
- 30) 劉枝万前掲書、209 頁。また鈴木前掲論文、27 頁。
- 31) 劉枝万前掲書、214 頁。また鈴木前掲論文、25 頁。
- 32) この土地区画は現在も痕跡を留めており、2023 年 3 月に筆者が虎子山から埔里市街を一望したところ、ふもとにはなお縦長に区画された耕地が残っていた。日本では武蔵野台地の三富新田が縦長の土地区画で有名であるが、埔里の場合は水源に恵まれていたこともあって稲作が主流だった（現在はマコモタケ栽培で知られる）。
- 33) 劉枝万前掲書、221 頁。芝原太次郎『郷土埔里社』（稿本）。芝原の著作については清水純「芝原太次郎著『郷土埔里社』にみる台湾原住民資料」『台湾原住民史研究』17、風響社、2013 年を参照のこと。
- 34) 劉枝万前掲書、221-247 頁。
- 35) 劉枝万前掲書、248-250 頁。また伊能前掲書、下巻、第 15 篇、番政沿革、漢番交渉余志、886 頁。
- 36) 伊能前掲書、下巻、第 15 篇、番政沿革、漢番交渉余志、890 頁。また劉枝万によると、芝原太次郎『郷土埔里社』も似た事例を紹介している（劉枝万前掲書、260 頁）。
- 37) 鄧伝安「水沙連紀程」（道光『彰化県志』巻 12 上、芸文志）。鄧伝安は江西浮梁県人で、鹿港同知から代理台湾府知府となり、後に台湾兵備道となった。『蠡測彙鈔』には「水沙連紀程」以外に「台湾番社紀略」「遊水裏社記」が収められている。
- 38) 佚名「埔里社紀略」。なお史料は姚瑩の職銜を前台湾県知県と記しているが、彼は 1821 年に署噶瑪蘭通判となっていた。姚瑩に諮問した方伝燧も「開埔里社議」で性急な開発論に否定的な見解を表明している（道光『彰化県志』巻 12 上、芸文志）。
- 39) 佚名「埔里社紀略」。なお姚瑩らの主張に賛同した地方官として、郭百年事件で封禁を唱えた淡水同知呉性誠の他、噶瑪蘭通判呂志恆（後に台湾府知府となる）がいたという。
- 40) 熊一本「条覆籌辦番社議」（丁曰健編『治台必告録 上』巻 3、台湾銀行経済研究室編、1959 年、229 頁）。また劉枝万前掲書、305-322 頁。
- 41) 熊一本「条覆籌辦番社議」。
- 42) 伊能嘉矩『台湾文化志』下巻、第 15 篇、番政沿革、第 1 章、理番施設、第 4 款、民番結婚の制限および葉育倫前掲論文によると、漢人の婿入婚による「内山」地区への入植は、平埔族が第一子の男女に財産を継承させる相続制度を持っていたことを利用して行われた。例えば漢人の林逢春は平埔族の「頭人」である潘進生の家に婿入りし、次第に潘家の土地を手に入れて近代の埔里を代表する有力家族に成長した。また 1847 年に「倡墾番地」して原住民の墓を荒らし、耕牛を



- 奪った罪で処刑された「新来熟番」の徐翹棋も平埔族に婿入りした客家移民であった（鄧相揚「平埔族拓墾眉社伝統領域的初探」、水沙連研究學術研討會編『劉枝万先生与水沙連区域研究』2008年）。このように漢人移民が婿入婚を通じて非漢人社会に定着するケースは両広、雲貴地方でも広く見られる。なお伊能前掲書によると民番婚姻の禁令が解除されたのは1875年であった（下巻、571頁）。
- 43) 熊一本「条覆籌辦番社議」。またこれらの記載を裏書きするように、1837年に彰化県人の黄天恵は水沙連の水裏、猫蘭、剥骨などに入植して開墾を進めたが、埔里へ入った一部の漢人は原住民の抵抗に遭って退去したという（岡田東寧『台湾歴史考』拓殖務省文書課、1897年、260頁、劉枝万前掲書、365頁）。
- 44) 熊一本「条覆籌辦番社議」。
- 45) 劉韻珂奏、道光二十七年八月十六日『宮中檔道光朝奏摺』20、148頁（国立故宫博物院蔵、宮中檔奏摺405010796号）。なおこの上奏文は「奏勘番地疏」として丁曰健編『治台必告録 上』巻3、207頁にも収録されている。
- 46) 劉枝万前掲書、351頁。なお劉韻珂の調査に先立つ1846年に北路理番同知の史密が北路協副將葉長春らと水沙連の巡視を行い、「籌辦番地議」で積極的な解禁論を展開した（丁曰健編『治台必告録 上』巻3、252頁）。
- 47) 劉韻珂奏、道光二十七年八月十六日『宮中檔道光朝奏摺』20、148頁。この他に劉韻珂が行った上奏に「奏開番地疏」（丁曰健編『治台必告録 上』巻3、207頁）がある。
- 48) 菊池秀明前掲論文。
- 49) 穆彰阿等奏、道光二十七年十二月二十二日（丁曰健編『治台必告録』巻3、同治六年、台湾省文献委員会印行、1997年、228頁）。
- 50) 劉枝万前掲書、第七章、滿清治下之理番設施、376頁。
- 51) 2024年3月埔里訪問記録。鈴木前掲論文1頁および簡史朗「『台湾埔里郷土志稿』導読」望麒麟家族史（『台湾埔里郷土志稿』再版本29頁）。
- 52) 鈴木前掲論文、4頁および18頁は黄存榮、黄大繆氏への聞き取りを行い、彼らが清朝による桃園一帯のタイヤル族弾圧に動員されたと推測した。いっぽう簡史朗氏は署台湾鎮総兵曾元福の上奏をもとに、澳漏、篤律は「内山」地区で活動した戴潮春反乱軍の鎮圧に加わったと述べている（『台湾埔里郷土志稿』導読32頁）。なお簡史朗氏が引用した史料原文は曾元福奏、同治四年正月十五日批、月摺檔603000349号、国立故宫博物院蔵。
- 53) 鈴木前掲論文、12頁。
- 54) 光緒三年八月鹿港理番海防総捕分府彭給東螺社及恒古城地方各佃戸諭示（簡史朗等編『水沙連埔社古文書選輯』国史館、2002年、60頁。また簡史朗「『台湾埔里郷土志稿』導読」（劉枝万『台湾埔里郷土志稿』再版本33頁）。
- 55) 光緒十二年九月代理埔里社撫民分府補用県正堂林給侑生望玉書即望麒麟（簡史朗等編『水沙連埔社古文書選輯』70頁）。
- 56) 光緒十二年十一月埔眉化番望麒麟帶毛全立合約字（簡史朗等編『水沙連埔社古文書選輯』190頁。また簡史朗「『台湾埔里郷土志稿』導読」（劉枝万『台湾埔里郷土志稿』再版本33頁）。
- 57) 伊能嘉矩『台湾蕃政志』台湾総督府民政部殖産局、1903年、292頁。また連横『台湾通史』巻33、鄭勒先列伝によると、彼は「從番俗、改姓名」して原住民の信頼を勝ち取り、塩や布などの取引を行った。非法な商人である番割に近い存在だったと見られる。
- 58) 劉枝万前掲書、392頁。ここで劉枝万氏は芝原大二郎『郷土埔里社』および『台湾慣習記事』第

1 卷第 12 号（1904 年）を参照している。

- 59) 2024 年 3 月訪問記録。埔里義民爺廟沿革、2008 年。この沿革は参考文献として劉枝万『南投県風俗志・宗教篇』稿、1961 を挙げていた。また祠内の位牌には「褒忠 粵東義民老爺尊神之位」とある
- 60) 2024 年 3 月訪問記録。維基百科、埔里恒吉宮。なお廟内には 1887 年に埔里社通判の呉本杰による「厚德配天」匾があるほか、「大正甲子年（1924 年）」に廟が再建された時に「埔里総董暨工商舖戸」が共同で立てた「母德配天」匾がある。現在廟の正面には「湄州大媽」と大書され、この媽祖が福建湄州から直接もたらされたと主張しているが、日本統治時代には後述のように鹿港、彰化県城の媽祖像を迎える「九月迓媽祖」という行事があったという。
- 61) 劉銘伝『台湾暫難改省摺』光緒十一年十月二十七日、『劉壮肃公奏議』巻 2。この上奏文は「台湾驟難改設省會謹陳管見疏」ともいい、『皇朝道咸同光奏議』巻 39 に収められている（馮用、呉幅員編『劉銘伝撫台前後檔案』近代中国史料叢刊続編、74 輯、261 頁）。また伊能嘉矩『台湾文化志』下巻、534 頁、劉枝万前掲書、394 頁を参照のこと。
- 62) 劉枝万前掲書、395 頁。また『霧峰林氏族譜』林朝棟の項は「劉公（銘伝）巡撫台湾、益倚重之、委辦中路勞務處。又開撫墾局、擢爲局長、使其招撫各處蕃黎、開拓荒地」とある（黃富三等編『霧峰林家之調查與研究』林本源中華文化基金会、1991 年、148 頁）。
- 63) 劉枝万前掲書、395 頁。
- 64) 伊能嘉矩『台湾蕃政志』270-272 頁。また伊能嘉矩『台湾文化志』下巻、540-544 頁。劉枝万前掲書 402 頁。
- 65) 筆者はその例として広東、広西、湖南のタイ系山地民族であるヤオ族に対する下山奨励と定着農耕民化政策について検討したことがある（菊池秀明「湖南、両広省境におけるヤオ族社会の変容と反乱」『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008 年、137 頁）。
- 66) 洋務運動時期の改革が抱えたこうした特質については、菊池秀明「近代中国辺境社会的「文明化」政策与实践——光緒時期広西西部地区の開発和地方政府」（第四届國際漢学会議論文集『辺区歴史与主体性形塑』中央研究院、台北、2013 年、211 頁）。
- 67) 伊能嘉矩『台湾文化志』下巻、546 頁。
- 68) 『霧峰林氏族譜』林朝棟の項は原住民地区の弾圧と開墾事業について「赴罩蘭、太湖、大嵵炭各蕃界躬親討伐、望風歸化者数十社、開拓土地数百里」と述べている。また 1888 年に台湾で清丈が行われると、これに不満な「土豪」の施九緞らが彰化県城を攻撃した。劉銘伝は徹底弾圧を命じたが、林朝棟は「不忍自傷其類」とあるように同郷人である鹿港一帯の住民を殺すに忍びず、首謀者を差し出させることで事態の解決を図ったという（黃富三等編『霧峰林家之調查與研究』148 頁）。
- 69) 光緒三年八月鹿港理番海防總捕分府彭給東螺社及恒古城地方各佃戸諭示。
- 70) 光緒四年十二月中路理番分府孫給七十二社屯番諭示（簡史朗等編『水沙連埔社古文書選輯』63 頁）。伊能嘉矩『台湾文化志』下巻、第十五篇、第三章、番人に対する課租、第三項、亢五租、706 頁。また邱正略『清代台湾中部平埔族遷移埔里拓墾之研究』256 頁は、この諭示にある「年応貼水社屯番穀一百四十石」という部分に注目し、道光年間に実施された埔里の番屯制度がなお行われていたことを指摘している。
- 71) 光緒五年十月中路理番分府孫給埔眉化番管下各佃戸民番人等諭示（簡史朗等編『水沙連埔社古文書選輯』65 頁）。鈴木前掲論文によれば、余清源は埔里南部の灌溉施設である南烘圳の水利権を

- 握って「水租」を徴収した。のち漢人によって新しい水路が拓かれると、余清源はその妨害を図り、最後は反乱の罪に問われて殺されたという（139 頁）。
- 72) 伊能嘉矩『台湾文化志』下巻、708 頁。劉枝万前掲書、407 頁。鈴木前掲論文、141 頁。
- 73) 光緒十二年九月代理埔里社撫民分府補用県正堂林給份生望玉書即望麒麟（簡史朗等編『水沙連埔里社古文書選輯』61 頁）。
- 74) 光緒六年十一月総社長余清源、巫宜福、潘進生等全立議定収租合約字（簡史朗等編『水沙連埔里社古文書選輯』187 頁）。また鈴木前掲論文、140 頁。
- 75) 黄昭堂『台湾民主国の研究——台湾独立運動史の一断章』東京大学出版会、1970 年。許世楷『日本統治下の台湾——抵抗と弾圧』東京大学出版会、1972 年。
- 76) 鈴木前掲論文、202-206 頁。簡史朗『『台湾埔里郷土志稿』導読』（劉枝万『台湾埔里郷土志稿』再版本 34-35 頁）。また清水純前掲書、50 頁。
- 77) 鈴木前掲論文、297-356 頁。簡史朗『『台湾埔里郷土志稿』導読』（劉枝万『台湾埔里郷土志稿』再版本 35-36 頁）。
- 78) 台湾文化部国家記憶庫「台湾基督長老教会愛蘭教会」。
- 79) 鈴木前掲論文、209-251 頁。なおここで鈴木氏は日本統治時代の黄利用が学務委員を任される一方で、アヘンの請売人であったことを語っている。
- 80) 2024 年 3 月埔里訪問記録。維基百科、埔里酒廠。
- 81) 2024 年 3 月埔里訪問記録、台湾文化部国家記憶庫「愛蘭紹興泉」「無某崎故事牆」。
- 82) 2024 年 3 月埔里訪問記録、水頭里鳳雛生態公園碑記、2010 年。
- 83) 2024 年 3 月埔里訪問記録、蜈蚣崙「平埔族番祖廟」歴史尋根追記紀念文、2017 年。
- 84) 2024 年 3 月埔里訪問記録、後にこの行列は 3 月 16 日に埔里日南天后宮が主催した「環保媽祖文化節」であったことが判明した。その案内文によると一行は埔里市内を巡回し、途中仁愛公園で信者に「祈求平安」の時間を提供し、素食をふるまうと記されていた (<https://www.facebook.com/photo?fbid=786000616893998&set=a.463869069107156>)。
- 85) 台湾文化部国家文化記憶庫「埔里天后宮媽祖廟——日南道卡斯族」「埔里日南天后宮」および「埔里天后宮」縁起故事 (<https://www.pulimazu1860.com/about/>)。
- 86) 2024 年 3 月埔里訪問記録、維基百科、埔里恒吉宮。また邱正略「戦後初期埔里地方信仰活動復振風潮」逢甲大学人文社会学院『逢甲人文社会学報』36 期、2018 年。
- 87) 2024 年 3 月埔里訪問記録、維基百科、義女廟。
- 88) 2024 年 3 月埔里訪問記録。台湾文化部国家文化記憶庫「埔里昭平宮育化堂孔子廟—簡解」。
- 89) 2024 年 3 月埔里訪問記録。
- 90) 王見川『台湾的齋教与鸞堂』南天書局、1997 年。志賀市子『中国のこっくりさん——扶鸞信仰と華人社会』大修館書店、2003 年。黄蘊『東南アジアの華人教団と扶鸞信仰——徳教の展開とネットワーク化』風響社、2011 年。武内房司編『越境する近代東アジアの民衆宗教——中国・台湾・香港・ベトナムそして日本』明石書店、2011 年。小武海櫻子「清末四川の鸞堂と宗教結社——合川会善堂慈善会前史」（日本道教学会『東方宗教』111 号、2008 年）など。